

第207回くらしの植物苑観察会 2016年6月25日(土)

- 盆行事にもちいる植物 -

山田 慎也(当館民俗研究系 准教授)

盆とは、7月15日を中心に行われる盂蘭盆会という仏教行事であり、先祖の霊が帰ってきて子孫のもてなしを受けるといふ民俗行事でもある。お盆の起源は、倒懸の苦しみを受ける死者のために僧侶に施しをすると七代の父母を救済するものといふ盂蘭盆経にもとづくものとされているが、イランの死霊祭祀が農耕儀礼と結びついたものといふ説もある。

日本でも祖先祭祀と結びつき、季節の節目の重要な行事として位置づけられてきた。しかし近年は墓参りの時期としてしか認識されていないこともある。盆行事では従来より、各地でさまざまな植物が利用され祭祀が行われてきた。基本的には身近な植物が使用されてきたが、今回はおもに依り代 祭祀空間、供物の観点から見ていきたい。

まず、依り代としての植物を見てみたい。「盆花」とは、盆に使用される花のことで、多くの地域でミソハギが使われる。そのほかオミナエシやキキョウ、ハギなどを指すこともある。盆花を山から取ってくることを「盆花迎え」といい、それは単に花として仏前に活けるためだけでなく、その花に霊を依り憑かせ、連れてくるためとも考えられてきた。都市では盆花などを売る市のことを草市という。京都では盆花迎えとして行われるのが、六道珍皇寺の迎え鐘である。黄泉を往復するといふ小野篁の信仰があり、迎え鐘をつきコウヤマキの枝を買って経木塔婆に水向けをして、それを持ち帰り仏壇に祀ることが霊のお迎えとなる。

つぎに祭祀空間としての植物では、盆棚に使用するものがある。関東地方では盆棚として青竹で死者を祀る空間を作る。青竹は今年生えた青々とした新竹を用いることが多い。また棚を設けマコモの莫産を掛け、上部はマコモの縄を張りホオズキなどを下げる。さらに周囲には、マセガキといい、竹を割ってその間に檜や杉の葉を挟んで作った垣根を巡らすことが行われる。こうした盆棚は近世末期にはすでにあつたようである。このような空間を作り、先祖の霊を祀ることが行われた。千葉県では新盆の時に大がかりな盆棚が作られていたが、いまではそれに代わって葬祭業者の盆祭壇が使用されている。

供物としての植物もある。盆棚には茄子や胡瓜、カボチャ、西瓜、トウモロコシなど季節の野菜や果物などが供えられる。さらにマコモの綱を張り、ホオズキのほか、稲穂、粟穂、まだ青い柿や栗の実などを下げるのも、供物としての意味があろう。

以上のように、盆行事ではさまざまな植物が用いられており、その多彩な姿を本報告では見ていきたい。

.....

次回予告 第208回くらしの植物苑観察会 2016年7月23日(土)

「シーボルトが紹介した植物」 辻 誠一郎 (東京大学大学院・教授)

13:30~15:30(予定) 苑内休憩所集合 申込不要